

タイ東北部の土器作り

植崎 彰 一 (当館総長)

LOUISE CORT
(CURATOR OF FREER GALLERY)

H. LEEDOM LEFFERTS
(PROFESSOR OF DREW UNIVERSITY)

1. はじめに

我国古代の土器製作技法については縄文土器・弥生土器・土師器など各時代の土器のそれぞれに関する考察が考古学的になされてきたことは改めていうまでもない。また、原始・古代の土器は性別分業として、女性の手で作られたことは正倉院文書の記載などによって早くから指摘されてきたところである。しかし、それらは古文書の解釈から導き出された結論ではあるが、作手が女性であることを示すのみ^(注1)であって、どのような技法によって作られたかは全く知られていない。また、このような性別分業は世界的に見て必ずしも普遍的なものでないことはアフリカの例を見ても明らかである。

ここで紹介するのはタイ東北部で現在焼かれている土器づくり村における土器製作技術の予備調査の概要である。植崎がこの土器づくり村落に興味を持ったのは、1991年に共同執筆者である Ms. Louise Cort がタイ東北部の調査からの帰国途中に日本に立ち寄り、土器づくり村落の状況を話したことに始まる。それは筆者が昭和33年の『世界陶磁全集1—日本古代篇』に書かれた藤沢論文以来、興味を持っていた日本古代の土器製作技術の復元に係わる貴重な資料が得られるとの確信^(注3)を持ったからである。その後1992年に植崎がアメリカに出張した際、本論の筆者3人で協議した結果、この調査を計画するに至ったものである。

一方、このような東南アジアにおける土器づくり村落の調査はすでに、清水潤三によってカンボジア・タイにおいて1957年以来行われており、1967年にも小山富士夫によってカンボジアにおける作例の紹介が行われている。また、海外においても1977年以降、各国の研究者によってタイの土器づくりの調査が報告されている。^(注4)^(注5)

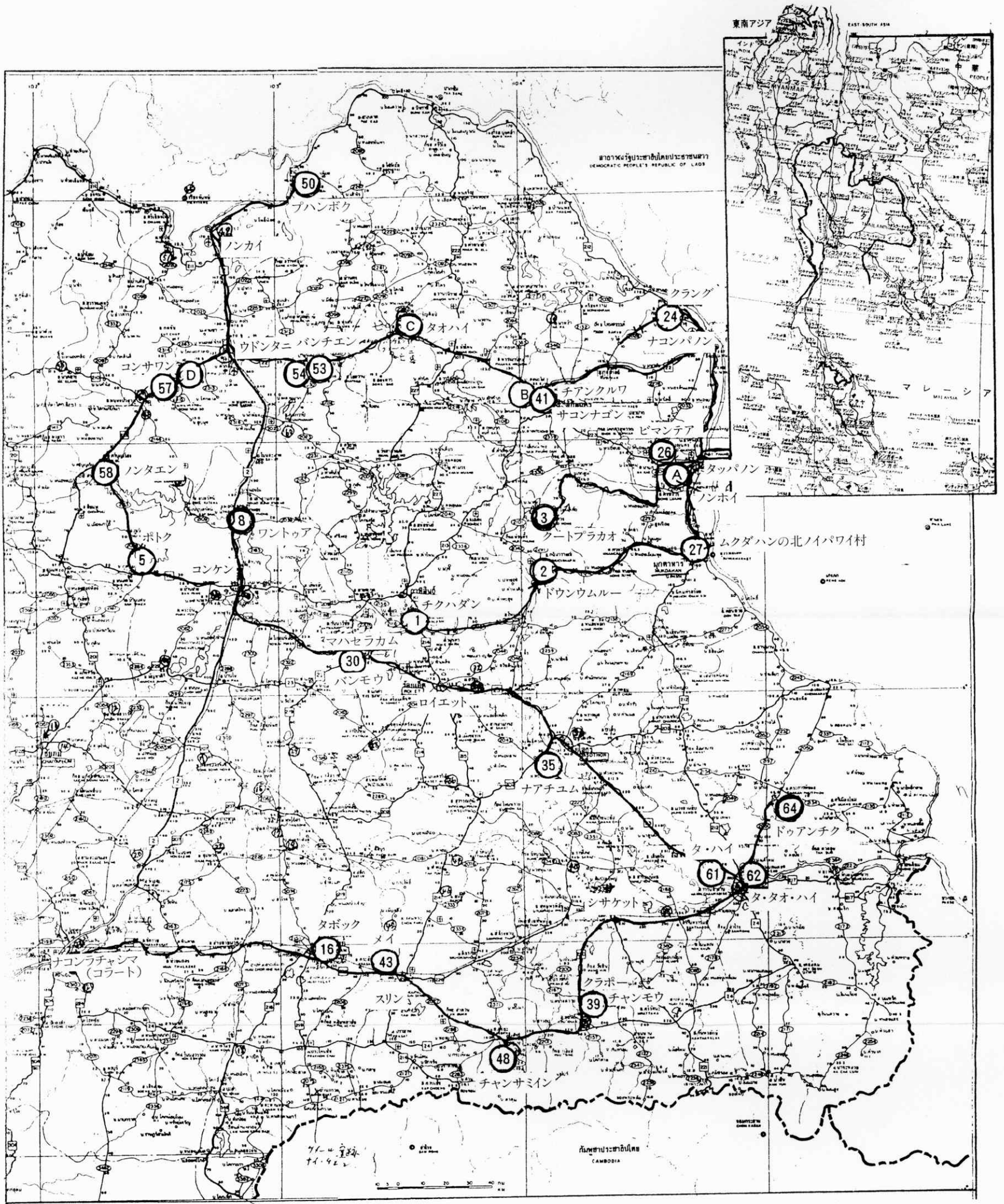
我々は1993年12月から数年計画で東南アジアにおける土器製作技術およびそれを支える村落の民俗調査を実施することとした。ここではその初年度の予備調査の結果を略述することとする。それは主として土器づくりに関する記録であるが、同地域では焼締陶も平行して行われており、それらは男性の仕事として行われているので、最後の項で若干触れることとする。

2. 調査地域とその村落構造の概要

(1) 民族と村落構成

カナダ政府の援助によって国立コンケン大学の SAMRUAT INBAN 教授が行った調査報告書 (SURVEY OF CERAMIC TECHNOLOGY IN THE NORTHEAST 1989) によると、タイ東北部の土器や焼締陶を焼成している村落は64ヶ所あることが記録されている。この地域では南部のカンボジア国境近くに9～10世紀のクメール陶器の古窯跡が点在するが、これらが衰退して以来、再び土器づくりに戻り、今日に至っている。しかし、土器づくりの村は年々減少の傾向にあり、その製作技術やそれを支える村落組織の記録作成は目下の急務なのである。

我々が1993年12月28日から1994年1月11日にかけて調査した箇所は、表1及び調査地点



タイ東北部の土器作り村調査地点位置図

番号	調査日程	窯No.	調査場所	土器 		窯	系統
1	93.12.28 (火) ～12.29 (木)	30	Baan Mau	土器		野焼	コラート
2	12.30 (木)	1	B. Chik Hadan	土器・B. Mau からきた		野焼	コラート
3	12.30 (木)	2	B. Doun Um Lue	土器・2台のロクロ		野焼	ラオ
4	12.30 (木)	27	B. Noi Pa Wai	土器		野焼	コラート
5	12.31 (金)	3	B. Kut Pla Khao				
6	94. 1. 1 (土)	26	B. Bi Man Tea				
7	1. 1 (土)	番外A	B. Nong Hoi	土器		野焼	プタイ
8	1. 2 (日)	24	B. Klang	土器・(ロクロ)		半地下 地上窯	ラオ
9	1. 3 (月)	41	B. Chiang Krua	土器		野焼	ラオ
10	1. 3 (月)	番外B	同上から西へ1km土取場 (女)	土器・(ロクロ)		野焼	ラオ
11	1. 4 (火)	番外C	B. Tao Hai	土器		野焼	ラオ
12	1. 4 (火)	53	バンチェンの西南	土器・(絵付)			ラオ
13	1. 4 (火)	54	バンチェンの西南国道沿い	土器		野焼	コラート
14	1. 5 (水)	50	R. Phan Bok				
15	1. 6 (木)	番外D	ウドンの西	コンロ(工場)		地上窯	中国人
16	1. 6 (木)	57	B. Khong Sawan	土器・(ロクロ)		野焼	コラート
17	1. 6 (木)	58	B. Nong Teang	土器(水カメ・植木鉢)			ラオ
18	1. 6 (木)	5	B. Pho Tok				
19	1. 7 (金)	8	B. Wang Tua				
20	1. 8 (土)	35	B. Naa Chum				
21	1. 8 (土)	61	B. Tha Hai				
22	1. 9 (日)	64	B. Daun Tik	土器(女)		野焼	ラオ
23	1. 9 (日)	62	B. Tha Tao Hai				
24	1.10 (月)	39	B. Kraphoo chang Maw	土器		野焼	スウイ
25	1.10 (月)	48	B. Cham Samin	土器		野焼	スウイ
26	1.11 (火)	43	B. Mai	土器		野焼	クメール
27	1.11 (火)	16	B. Thabok	土器		野焼	クメール

表1 調査日程表と地点

位置図に見る如く、64ヶ所のうちの23地点と今回の調査で新たに確認した4地点の合計27ヶ所である。

この地方には、現在5つの民族が混じりあって村落を形成しているが、大まかにみると北部から東部にかけてはラオス国境からメコン河を渡ってきたプタイ族やラオ族、南部にはカンボジアから入ってきたクメール族やススイ族、中部から西部にはバンコク方面から入ったこの地方の中心的な民族であるコラート族が居住している。地域ごとにかかなりの方言があって、現在の標準的なタイ語の通じないところもある。

我々はコンケンから車で東南へ1時間半ほどの距離にあるマハセラカムの国立スリナカヴィンロット大学（現マハセラカム大学・ワジュパ教授の研究室）を基点にして調査を進めたが、マハセラカムから30分ほど南に下がったところにあるバンモウ（Baan Mau；Baanは村の意）に土器作りの典型例をみることができた。ここでの村落構成は以下のようである。

五百メートル四方に約50軒が集まり集落を作るが、雨期に水田耕作を行い乾期に十数軒が土器作りを行う。土器作りを行わない農家は、乾期には男性の大半がバンコクへ出稼ぎに出掛けるといふ。村の入口と裏側には広場があり共同使用の場所となっていて、土器の焼成にはこの場所が使われている。また、各家の端には高さ1.5～2メートルほどのコンクリート製の大きな水甕が置かれていて、雨期に溜めた天水が入っている。

（2）家族構成

図I-1は、タイ東北部にみられる一般的な家屋で、四畳半と六畳の合計2部屋に台所用のテラス（左）と作業用テラス（右）をもっている高床式の家屋である。ここに母、娘夫婦、子供6～7人が住む。家は女性相続で、財産は母親が管理する。末娘が結婚して相続するのが通常例で、姉夫婦が屋敷地の中に別棟を建てて居住する場合も多く一軒の農家に3～4棟の家屋が並ぶ例もある。また、屋敷地の一角には高床式倉庫（1間×2間の規模：図I-2）が作られ穀倉としてるのが米作り農家の例にみられる。これらはまさに日本の弥生時代を思わせる風景である。こうした家族構成の単位で土器作り農家の場合は、乾期（12月～3月、場合によっては4～5月まで）に通常3～4回の焼成が夫婦の作業で行われる。多い場合には最大7回という例もあった。但しこの例は水田を持たない家の場合であった。逆に1～3月に2回のみという例もある。

3. 土器作りの工程とその作業

土器作りの実際については、各村落で若干の違いがあるが、総括的に眺めてみると以下のようである。

（1）準備作業

イ. 粘土採掘

粘土は、主に水田の下の粘土を男性が採掘するが、女性の賃仕事として行われる場合もある（図I-3：写真は表1 No.10一窯No.番外Bの地点で、たまたま女性が土掘りを行っていた）。土地は他人の土地でも乾期に地主に金を払い採土する。1Kew（約1m³：1×2×0.5m）当りを280パーツ（約1200円）の金額で買い、まず水田表土を深さ30cmほど除去し、全面をカケヤ様の道具で叩く。次に木鍬で30cm角に粘土を採掘する。次にまた表面を平らに叩き、再び30cm角の粘土を採掘する。図I-3では280cm四方、深さ135cmまで坑を掘っていた。一方、村外れを流れる川岸に露頭する粘土層（図I-4：表1 No.2一窯No.1のChik Hadan村の例）も採掘の対

象としている。これは田土よりも質は悪いが、土器には充分使えるものであった。こちらは所有権がないので誰でも採掘できる。こうした土地所有形態は原始共同体的なもので、農家の家と屋敷地と水田には所有権が存在するが、他の土地は「王様の土地」であるから所有権はないとされ、勝手に移住してくる人々もある。B.Chik Hadan の村落でも80軒中10軒（現在は5～6軒）が土器作りで、うち9軒は100kmほど西のBaan Mau から移住した人々だった。なお田土の場合、水田下に黒い土と赤い土の2種があり、黒い土は植木鉢にし、大甕製作には両者の粘土を混ぜ合わせるという。また田畑の下に深い豎坑を掘り（4m位）、底土を左右に掘り抜けて採掘する場合も各所でみられる。

ロ. シャモットの製造

次にシャモットを作るのであるが、これはまず糞と採掘した粘土（池の底の粘土を用いる場合もある）を混ぜ、直径20cmほどの玉にして200個前後を直径2m、深さ50cmほどの凹地を広場に作り、2日間かけて野焼でじっくり焼き上げる。村の入り口には、合計400個ほどのシャモットが焼成されていた（図Ⅰ-6）。この焼いた玉は木製の臼の中で豎杵を用いて突いて粉碎する（図Ⅱ-1）。これも弥生時代と共通する道具である。臼は直径30cm、高さ65cmほどで、逆転して土器の成形台としても使用する。粉碎には、木製の足踏み臼（図Ⅱ-2）を使用する家もある。豎杵使用が大半で、足踏み臼の使用は少数例であった。この粉末を篩にかけて細粉の精製品を取り出すのである（図Ⅱ-3、4）。

（2）土器作成工程

胎土作り：奠座の上にビニールを敷き、甕に入れておいた粘土にシャモットを混ぜながら足で捏ねる（図Ⅱ-5）。ここまでは本来男性の仕事である。なお少量の場合は、一人で行うことが多い。

成形第一工程：ここから女性の仕事となるが、まず捏ねた粘土を太い棒状に転がし（図Ⅱ-6）両側から親指をあて穴をあける（図Ⅲ-1）。さらに棒を差込み（図Ⅲ-2）、棒の両端をもって回転させ膨らませて太いシリンダーを作る（図Ⅲ-3）。少々乾燥。

成形第二工程：少し乾かせたシリンダーを切り株の上に置き、右手にもったビニール（昔は木の葉）を口にあて右回り（時計回り）に口縁を上げながら口頸部を作る（図Ⅲ-4）。中には古い土器を逆さまにして、上に布をかけ台にして土器作りをする例もある（図Ⅲ-5）。また、臼を逆転させた台の上に土器を乗せ、時計回りに回って口縁を作る例もある（図Ⅲ-6）。しばらく乾燥させる。

成形第三工程：再び切り株の上のせ、内側に手を当て外から平らで楕円形の板状具（図Ⅳ-1中央4個）で叩きながら左回り（時計と逆回り）に回って肩の部分を膨らませながら基本形を作る。乾燥。

成形第四工程：今度は低い台に座って股の間に土器を置き、キノコ状の形に焼いて作った土製の当て具（図Ⅳ-1左2個）を左手に持ち内側に当て、外側を右手の叩き具で叩き土器を一定の大きさまで膨らませて行く。厚さは5mm程度仕上げ。底部は自然に塞がっていく（図Ⅳ-2～4）。乾燥。

仕上げ：成形された土器は叩き痕をそのままにしておく場合と、平坦な叩き具で面を平滑にし水をぬって滑らかに磨き上げる場合とがある。完成して乾燥。通常、1日に1人で水ガメ10個位を成形する。

(3) 土器の焼成（男女の共同作業）

まず男性が、焼いた粘土の固まり（支え具）を50～80cm間隔に3×4m（あるいは4×5m）の範囲に置き、その上にやや太い木の枝を格子状に乗せる。その上に細い枝を十字に組合せ（図Ⅳ-5）、焼く準備をする。

その上に男女が一緒になって、成形された土器（最初の完成土器から約10日間ほど経過している。直前のもは火にあぶって乾燥させる）を口を下にして乗せていく（図Ⅳ-6）。次にその上に口を上にして乗せていく（図Ⅴ-1）。2段まで積み上げるのみで、それ以上は積まない（図Ⅴ-2）。ほぼ60～100個が一度に焼かれる数字である。土器の設置が完了すると藁を全体に掛ける。そして台木の下すき間から火をつける（図Ⅴ-3）。燃えるに連れ徐々に藁を乗せ、土器を作った女性が火のまわりの悪いところを主人である男性に教え、製品の完全な状態で焼上がる様指示を出している。焼成時間は、早い場合は46分、通常も50～60分である。焼成後のさまは、おそくとも翌朝までである（図Ⅴ-4）。

土器作りの女性の主人である男性が翌朝、トラックに土器をビニール紐で縛って積み、売りに出掛けるのである（図Ⅴ-5）。国道沿いの店で販売してもらう場合や注文主に届ける場合など、さまざまである。昔は、布に包んで天秤棒で川辺まで運び、舟に積んで男性が売りに出掛けた（図Ⅴ-6）といい、かなりの流通圏をもっていた。メコン河へ出て流域の村への供給をめざしていたのであろう。

以上がタイ東北部の土器作り焼成の様相である。次に焼締陶を眺めてみる。

4. 焼締陶の製作の様子

先述したように、焼締陶の製作は男性が中心となっている。

調査地点27ヶ所のうち大半が土器作りであったが、7ヶ所が焼締陶の製作を行っていた。ろくろ成形が大半で、窯体構造も窖窯あり、地上窯ありで変化が激しい。図Ⅵ-1～6は蹴ろくろを使った甕の製作工程である。

図Ⅵ-1～2は、奥さんが手でろくろを回すもので、左回転のろくろで主人がこね鉢を作る光景と彼らの窖窯である。完全に掘り抜きの窯である。

図Ⅵ-3～6は表1のNo.20（窯No.35）での窯とこね鉢や大甕、大壺などの日常容器の焼締陶の作例である。

以上、とりあえず調査のうちの主として土器の製作過程についてのみ書き留めた。詳しい調査報告は全調査終了後、発刊する予定である。（文責 檜崎彰一）

注1 正倉院文書・天平勝寶貳年(750)の「浄清所解 申作土器事」には土器を製作するに当って男性の讃岐石前が「相作掘土運打薪採藁備并進京」、女性の借馬秋庭女が「作手」を担当しており、男女性別分業をしていたことが知られる。

注2 森淳『アフリカの陶工たち・伝統工芸を追って二十年』 中公新書 1992年

注3 藤沢一夫「土師器とその性格」『世界陶磁全集 1』 河出書房新社 昭和33年

注4 清水潤三「カンボジアにおける土器作り部落とその技術」『民族学研究』 23 1959

注5 小山富士夫「土器をつくる村」『カメラ芸術』 108号 1962年



1. タイ東北部農村の一般的民家



2. 穀倉

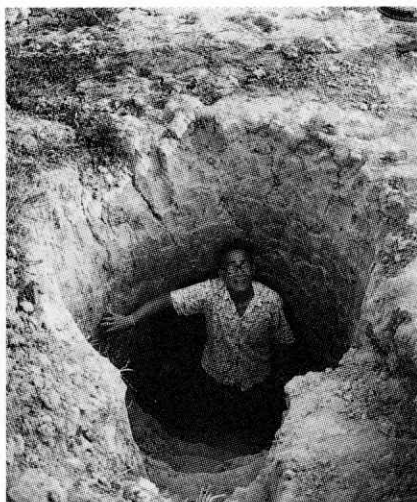


3. 水田下の粘土採取



4. 川縁に露出する粘土採取

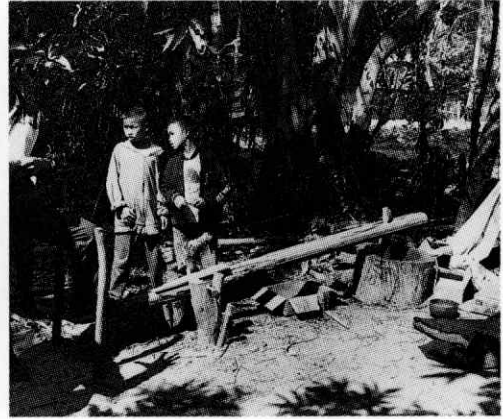
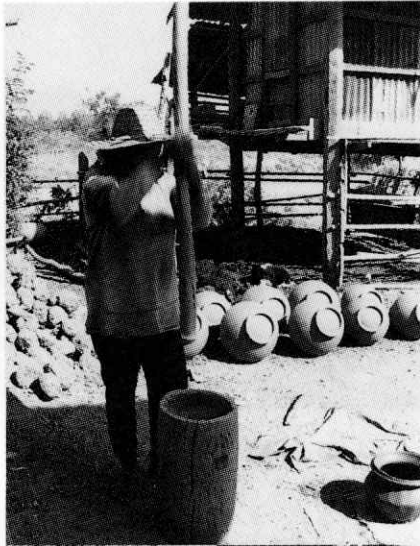
5. 水田下の
縦孔粘土採掘



6. 共同広場でのシャモット焼成

図 II

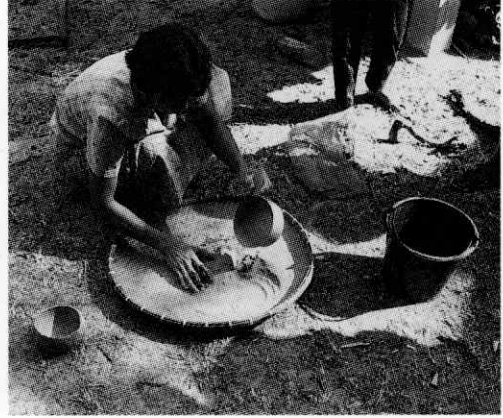
1. 木臼でシャモットを粉碎



2. 足踏臼でシャモットを粉碎



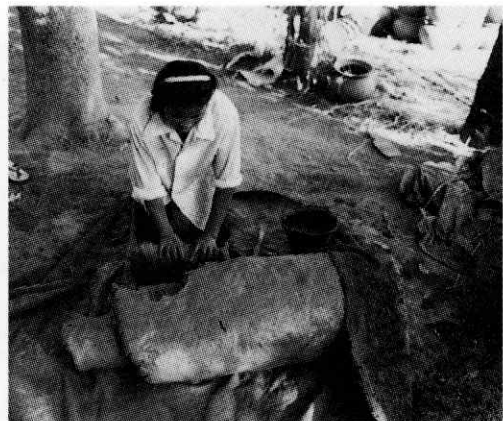
3. 粉碎したシャモットを篩にかける



4. シャモットの細粉の精選



5. シャモットを混ぜた粘土のならし



6. 土器成形 (I) 粘土棒づくり



1. 土器成形 (2)



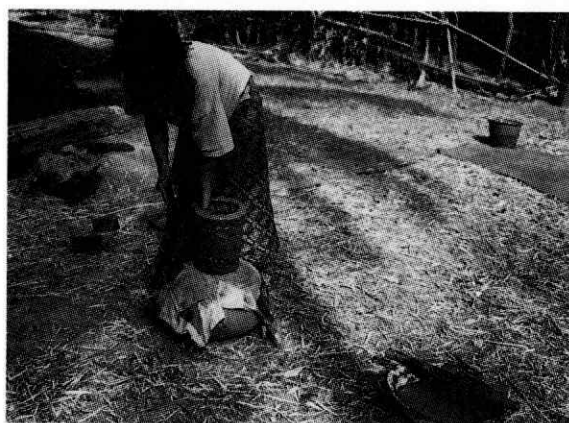
2. 土器成形 (3)



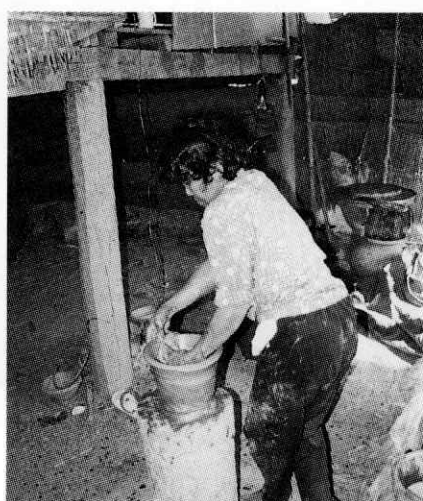
3. 土器成形 (4)



4. 土器成形 (5)

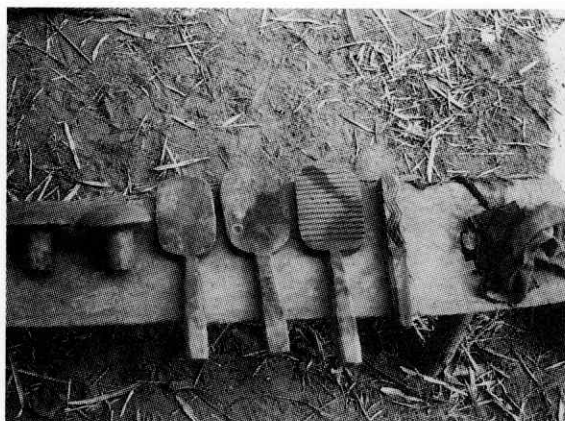


5. 土器成形 (6)

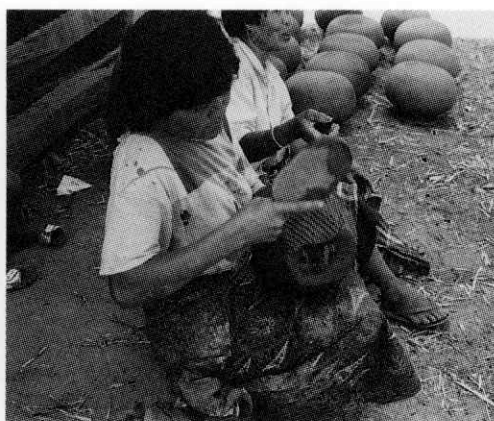


6.
土器成形
(7)

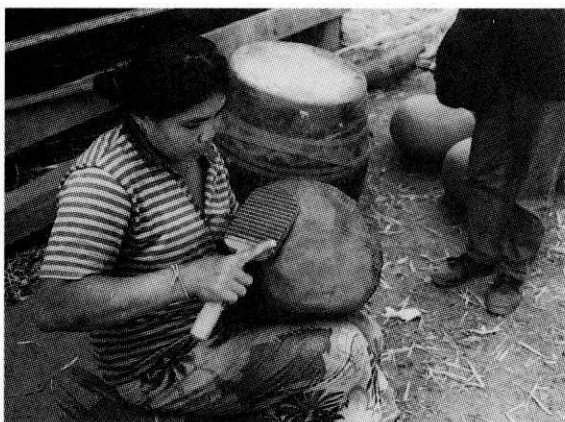
図Ⅳ



1. 土器成形用具



2. 土器成形 (8) 叩き



3. 土器成形 (9) 叩き



4. 土器成形 (10) 叩き



5. 土器焼成床づくり



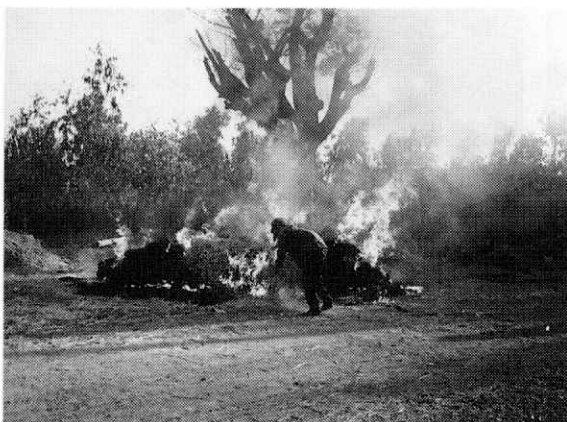
6. 土器焼成準備 (1)



1. 土器焼成準備 (2)



2. 土器焼成準備 (8)



3. 土器焼成



4. 焼成後のさまし

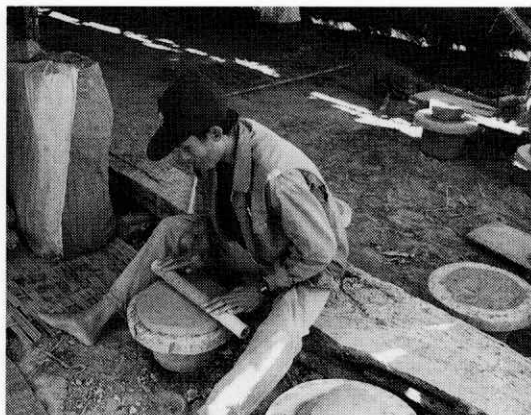


5. 販売へ出発

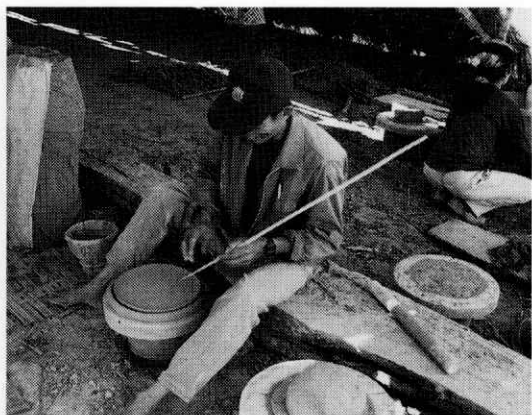


6. 昔の土器販売輸送舟

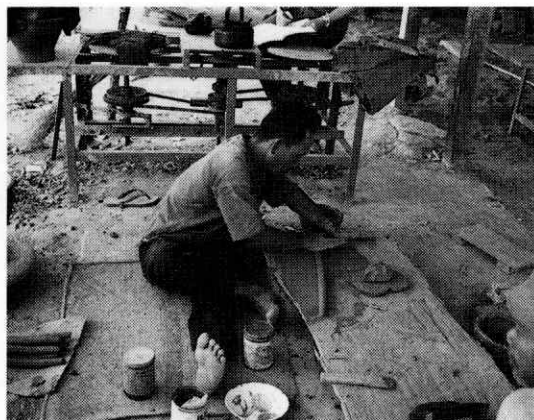
図 VI



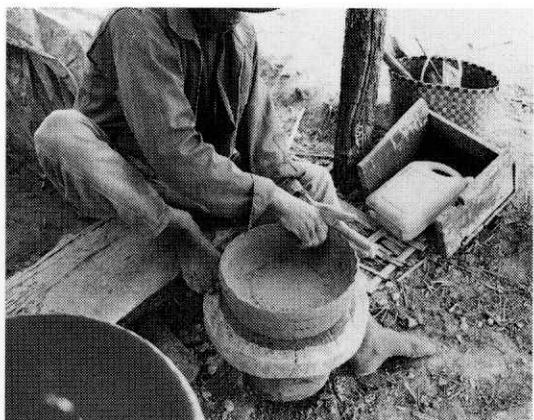
1. 焼締陶成形 (1) 底づくり



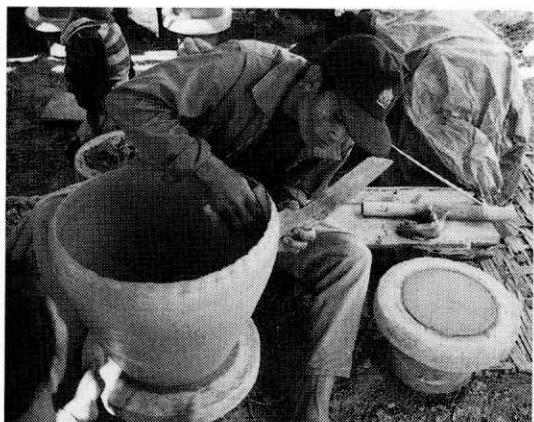
2. 焼締陶成形 (2) 底づくり



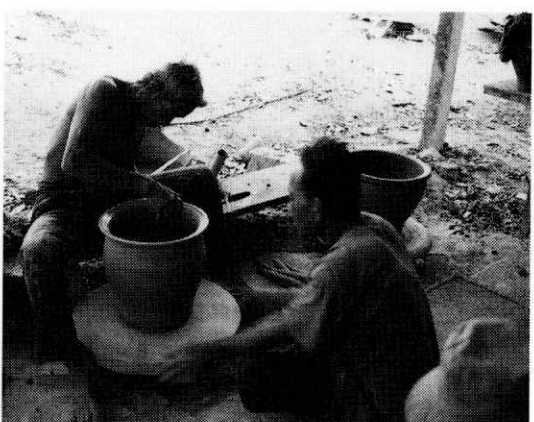
3. 焼締陶成形 (3) より紐づくり



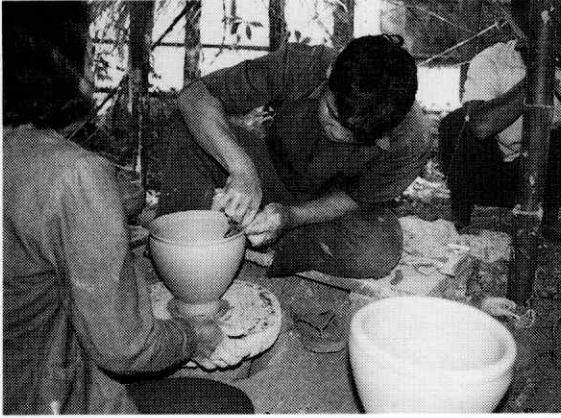
4. 焼締陶成形 (4) 胴づくり



5. 焼締陶成形 (5) 胴部ヘラ調整



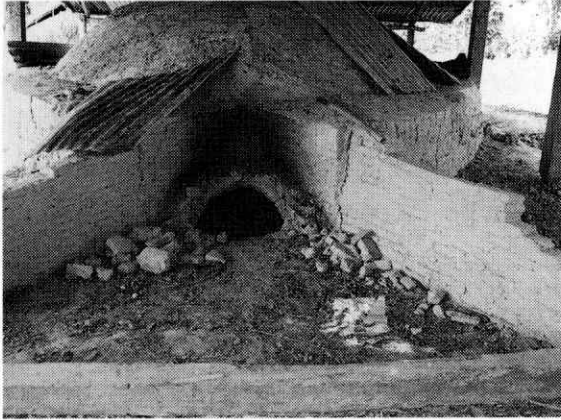
6. 焼締陶成形 (6) 口づくり



1. 焼締陶成形 (7) こね鉢口づくり



2. 焼締陶 窖窯



3. 焼締陶 地上窯



4. 焼締陶 鉢とこね鉢



5. 焼締陶 甕 (米収納)



6. 焼締陶 壺